

OPINION

私はこう考える

高山俊吉 弁護士

1940年東京生まれ。東京弁護士会所属。
高校での交通安全教育の講演も数多く行っている。
交通関係分野の編著書には「レーダー事件弁護の手引き」(青峰社)「道交法の使い方」(青人社)「道交法の謎」(講談社)など。

「注意しろ」「危険には近づくな」の 押しつけ教育から内発的に注意する きっかけづくりの教育へ

高山さんは、昨年8月に(社)日本自動車工業会が発行した『セーフティ・アクション21 高校生の交通安全教育』の編集委員を務めた。そのとき、学校における交通安全教育は、「一般教科の教育と同列に見ることはできない」と改めて認識したのだ。「一般の教科は基本的に知識をもつことを成果とするのに対し、交通安全教育は交通安全の知識、例えば、昨年の交通事故死者数とか、赤信号の意味などの知識量では成果を判定しません。それらの知識を自分自身の行動原理に結びつけていくかどうかが教育の成果を見る。そこに一般教科との明確な違いがあります」。

高校生の心に 入っていく教育を

知識は行動原理を決めるモチベーションの一部にはなるが、知識をもつだけでは直ちに行動原理ができるわけではない。安全講習会などではよく事故統計、とりわけ死者の数字などから話が生まれるが、聞いている高校生は「またか」という表情で、とたんに会場のあちこちで私語が始まるといふ。数値化は理解のきっかけにはなっても、無機質化、客観化された数字の一人歩きは、高校生の心に入っていないのだ。個々の人間にとっては1つの死がすべてになる。高校生が真剣に聞くのは、実際の事故の話です。被害者はどうなったか、加害者はどうなったか、親はどつしたか、と話が具体的にあれば必ず関心を示します。



高山俊吉氏

ところが問題があります。注意は内発的なものでないと身につかない。先生たちが外からあれこれ言っても身につかない。「注意しろ教育」をいくらやっても、アンケートをとると彼らは「事故の時は事故だ」と回答します。事故は起きるもの、注意しても仕方ないという意識が強い。そして高校生たちが知識を自分自身の行動原理に結びつけ、内発的に注意する意思・意欲を育てるそのきっかけづくりが交通安全教育の基本です。

「行動を通して体得 させる」参加型教育へ

内発的に注意する手法として、高山さんが重視するのは「教え込み、守らせる」ではなく、「行動を通して体得させる」ことだ。たとえば、自転車通学をしている高校生たちへ、交差点での自転車の行動パターンをビデオに撮らせて、これを教材に生徒同士で議論をさせる。どのような行動が危険なのかを考えさせる。問題はビデオにあり、どうしたら危険でなくなるのかということになり、議論させる。交通安全施設の改善案が出てくれば、生徒たち自

身に警察など行政機関に要望させる。「その中で、人の生命を守り、事故を防ぐことに関するいろいろな人が関わっていることを知るようになります。そこには安全施設、安全なクルマ、安全な道路が必要だということもわかります。実技体験会ではクルマにはねられた人形を見て笑つ子もいるが、『あれは本当は人形じゃなくて、人間なんだよ』と言つ子もいる。その子には自ら交通安全を考えるきっかけになっているわけです。交通安全の世界は、多くの人が関わって実現する生命の大切さを広い視野で考えるものだと思います。高校3年間の教育が生徒、交通安全を考えていくきっかけになってくれればいいですね。実際に生徒同士の議論を見てみると、だんだんまじめになっていく。危険についてこういう可能性がある、ああいう可能性があると、想像力を膨らませて議論するようになり、ます。ともすれば今どきの高校生は、という言い方がありますが、高校生が議論していく姿を見て、私はとても希望がもてます。高山さんの参加型教育への期待は大きい。



VOICE 読者の声

ご愛読者の皆様へ: SJに対するご意見・ご感想をお寄せください!!
SJ編集部では今後の紙面づくりの参考にさせていただくため、日頃よりご愛読いただいている読者のみなさまのご意見・ご感想をお待ちしております。SJへのご意見・ご感想は下記のメールアドレスへ。
sj-mail@ast-creative.co.jp
弊紙に対する個別のご質問には回答できかねる場合がございます。あらかじめご了承ください。調査協力等のためにご連絡をさせていただく場合があります。

交通安全の「今」を知り 現場で活かしたい

原山紀夫
神奈川県立相原高等学校(神奈川県)

本校は毎年、神奈川県各地区で行われている交通安全高校生会議に出場しています。この会議は高校生に交通安全の意識を高めてもらうことをねらいとして開催されており、本校の生徒は自転車の正しい乗り方のビデオを製作したり、昨年は交通安全クイズのソフトを作りました。このクイズはCDにして、神奈川県内の各校に配布しました。今年は交通法規中心だった昨年のソフトにさらに手を加え、運転者の心理に焦点をあてたものにするべく、生徒と一緒に準備を始めました。

こうした交通安全指導を行う上での情報集めにSJ紙を活用しています。交通

安全の各種イベントなどは、高校生が参加できないものであっても、その主旨を活かした同様のイベントを自分たちで行うヒントがもたらえています。また、そういったイベントや、交通安全教育がどこで行われているかを知る手がかりにもなっています。情報収集という点では、「DOCUMENT EYE」にも注目しており、7月号の「高速道路で一人乗りをするパツセンジャーの乗車姿勢と服装を見る」でも生のデータ、今の交通状況を知ることができ、とても興味深いと思います。参考になるので、生徒たちにも読んでほしいと思つていますが、高校生が読み続けられるよう、興味を引くような記事、たとえばクルマやバイクのハード面についての掲載も今後は期待しています。

安全に乗ってもらいたいので バイクを好きになつてほしい

辻井克明
(有)山下オート販売(大阪府)

当店で、バイクを購入されたお客様に安全に乗っていただくために、納車時に敷地内で操作方法等のアドバイスをしています。お客様一人ひとりに合わせて、アドバイスの内容も基本的なエンジンのかけ方から、応用的なことまでレベルは様々です。やはり、買ってもらった方には、まず自分でバイクに乗って家で安全に帰っていただきたい。そして、バイクを好きになってほしい。ですから、アドバイスにもついつい力が入りますね。当初はクルマの免許のみ持つていて、原付を買われたお客様がバイクに興味を持ち、125cc、400cc、750ccと乗り換えられた方がいます。その時は嬉しかったですね。

バイクを好きになるには、まずきちんと

と乗れるようになるだけでなく、安全運転が基本となりますので、アドバイスもそこを踏まえたものになっています。その際、本田技研工業(株)安全運転普及本部が5月に発行した小冊子「トラフィック・コミュニケーション」をお渡しして四輪は二輪をどう見ているのか、二輪は四輪をどう見ているのかを知っていただくようにしています。「自分の存在をできるだけアピールするように」など、四輪とのコミュニケーションの大切さを伝えるように心がけています。

今回、「セーフティジャパン」に初めて参加しますが、普段お客様に伝えている「無理をせずにキレイに」乗ることがどこまで通用するかチャレンジしたいと思つていま